源信撰『要法文』の撰述年次について

上 杉 智 英

序

源信（942—1017）撰『要法文』は現行活字本（『恵心僧都全集』

5、『大日本仏教全書』32所収。底本は慶安四年版本）の本奥書に、

于時寛和二年丙戌七月二十五日 沙門源信記

と撰述年次も明記されており、『仏書解説大辞典』（11、156頁。

田島德音執筆）、『大日本仏教全書』解題（97、326頁。関口真大執

筆）等の先行研究においても疑撰・仮託説は提唱されておら

ず、源信四五歳の撰述として扱われてきた。ただし佐藤哲

英^①、合阪逸朗^②の両氏は金沢文庫蔵の鎌倉時代古写一帖に、

寛弘七年庚戌七月二十五日 天台山首楞嚴院沙門源信記

と、現行の流布本と異なる本奥書がみられることを指摘され、

その撰述年次に留意すべき事を首唱されている。

これに対し八木晃恵氏は寛和二年・寛弘七年の両奥書を正

しいとする『要法文』再治説の可能性を示唆され、また速水

侑氏^④は本書跋文にみられる「依海公請聊集此文」に拠り、

寛弘七年当時学匠として大成していた安海がこのような基礎的項目の解説をわざわざ源信に請うとは考えられないとして寛和二年の撰述とされている。

このように『要法文』の撰述年次に関しては前掲の合阪氏によって「将来有力な古写本下巻が見出されたら本書の製作年時は容易に決定されるであろう」と予見されているにも拘わらず、八木氏の再治本説、もしくは速水氏の海公＝安海説に因り、流布本の本奥書にみられる寛和二年（986）、源信四五歳の撰述として認知され、未だに文献学的見地からの検証は行われていないのが現状である。

拙稿は近年の聖教調査の成果により確認し得た『要法文』諸本に基づき、その撰述年次を再検討するものである。

一、諸本に拠る本奥書の検討

先行する研究、調査報告^⑤、並びに聖教調査によって増補版『国書総目録』（7、890頁）未記載の四点を含む以下、十二点

（刊本二冊、写本十帖）の存在が確認できた。

【刊本】

寛永三年版⁽¹⁶²⁾、古活字版

慶安四年版⁽¹⁶⁵⁾

【写本】

大治四年写⁽¹¹²⁾、金沢文庫蔵（以下、金沢文庫A本）

長寛元年⁽¹¹⁶³⁾以前写、金沢文庫蔵（以下、金沢文庫B本）

書写奥書なし（鎌倉時代）、金沢文庫蔵（以下、金沢文庫C本）

永暦二年写⁽¹¹⁶⁾、西教寺蔵（以下、西教寺本）

書写奥書なし（鎌倉時代か）、真福寺蔵（以下、真福寺本）

書写奥書なし（鎌倉時代か）、金剛寺蔵（以下、金剛寺本）

承元二年写⁽¹²⁰⁸⁾、高野山正智院蔵本（以下、正智院本）

寛正二年写⁽¹⁴⁶⁾、身延文庫蔵（以下、身延文庫本）

建長三年写⁽¹⁵⁵⁾、鈴鹿隆男氏蔵（以下、史料編纂所本）

高野山持明院蔵本（以下、持明院本）

これら諸本間には調卷・本奥書の相違が認められる。以下、

調卷に拠り類別すると、

【三巻本】慶安四年版本

【二巻本】寛永三年版本、金沢文庫A・B・C本、史料編纂所本、

真福寺本、金剛寺本、正智院本

【不明】身延文庫本、西教寺本、持明院本

となるが、康和三年⁽¹¹⁰⁾成立と考えられる大江匡房撰『続本朝往生伝』⁽⁶⁾源信伝には「要法文二巻」の記述がみられ、ま

た平安末期書写と考えられる『一切経論律章疏集（伝録）并私記』⁽⁷⁾にも同様に二巻として採録されている。

つまり現行流布本で知られる三巻本は最も新しい版本である慶安四年版本にのみ見られる調卷であり、現存諸本の形態や諸目録等の記載に拠るならば平安末期における『要法文』の調卷は二巻であったことが類推される。

次に本奥書の相違であるが、諸本中本奥書が確認される六点はその年号に拠り以下の通り類別される。

【寛和二年】

寛永三年版 于時寛和二年丙戌七月二十五日

慶安四年版 于時寛和二年戊戌 七月二十五日

【寛弘七年】

金沢文庫C本 寛弘七年^{庚戌}七月十五日 天台山首楞嚴院沙門源信記

真福寺本 寛弘七年^{庚戌}七月十五日 沙門源信記

身延文庫本 于時寛弘七年^{庚戌} 七月十五日 □□記

史料編纂所本 于時寛弘七年^{庚戌} 七月十五日 沙門源信記

それでは本書の撰述は寛和二年⁽⁹⁸⁶⁾・寛弘七年⁽¹⁰¹⁰⁾の何れであろうか。注目すべきは、寛和二年撰述とするのが寛永三年版⁽¹⁶²⁾・慶安四年版⁽¹⁶⁵⁾と両者共に近世の版本という事である。前述した通り『要法文』撰述当時の調卷は二巻本であったと類推されるが、二巻本の形態を保っている八本の内、本奥書を有する金沢文庫C本・真福寺本・史料編纂所本の

何れもがその撰述年次を寛弘七年としており、寛和二年の本奥書を有する古写本は現在の所確認されていない。

なお第六十、天台教文の条には「一乗義別有三卷抄」。更不煩述⁸⁾との記述がみられる。現存する源信著述の中、三卷本は、『因明論疏四相違略註釈』（979年成立）、『往生要集』（985年成立）、『一乗要決』（1006年起筆）、『正修觀記』（仮託か）、『天台円宗三大部鉤名目』（仮託）、『万法甚深最頂仏心法要』（仮託）、『妙行心要集』（仮託か）の七点が数えられるが、これらの中で一乗の義を述べたという「三卷抄」を「一乗要決」とみなすことはその内容上適切であると考えられる。『一乗要決』はその自序に寛弘丙午歳の撰述（もしくはそれ以降）である旨が明記されており、それを引用する『要法文』は寛弘三年⁽¹⁰⁰⁾以降の撰述ということになる。

以上、現存諸本の本奥書、並びに本文中に『一乗要決』と考えられる記述がみられることを勘案すれば『要法文』の撰述年次は寛弘七年⁽¹⁰¹⁾と考えるのが妥当であろう。

二、再治説の検討

『要法文』が寛弘七年の成立であるとすれば従来の説である「寛和二年」の記述は如何なる意味を持つのであろうか。両者が共に正しい可能性はあるのであろうか。ここでは八木氏の示唆された再治説を改めて検討していく。

源信撰『要法文』の撰述年次について（上 杉）

『要法文』に未再治本・再治本の存在を仮設すれば、現存する二種の本奥書に拠り寛和二年七月二五日に一次成立、その後寛弘七年七月二五日再治ということになる。つまり現存諸本はその本奥書に拠り、

【初稿本系統】 寛和二年成立……………寛永三年版・慶安四年版
【再治本系統】 寛弘七年成立……………金沢文庫C本・真福寺本
身延文庫本・史料編纂所本
と類別される。

しかし実際に両系統を対比してみても再治と言いつける程の相違を見出すことはできず、『要法文』再治説、つまり「寛和二年」「寛弘七年」の両奥書が共に正しいとする仮設は成立し難い。八木氏は実際に金沢文庫C本と「寛和二年」の本奥書を有する本を比較した結果に基づき再治本の可能性を示唆された訳ではなく、再治本説は異なる二つの奥書に論理的整合性をもたらす一試案として供されたものと考えられる。

源信在世時（942—1017）において、初字に「寛」を有する元号は寛和（985—987）・寛弘（1004—1012）・寛仁（1017—1021）の三つである。このうち寛仁元年（1017）の六月十日に源信は七六歳で逝去しており、寛仁年間の七月二五日に『要法文』を撰述することは不可能である。つまり源信在世時において「寛弘」を見誤る余地は「寛和」しか有り得ないと言えよう。さらに「弘」の異体字・くずし字を「和」と見誤る蓋然性、並びに

両奥書にみられる月日の一致を勘案するならば「寛和」は正しい撰述年次の元号である「寛弘」の誤認であると考えられ⁹⁾。

結

以上、現存する『要法文』諸本にみられる本奥書、並びに再治説を検討することにより、その撰述年次が寛弘七年⁽¹⁰¹⁾であること、従来の定説である寛和二年⁽⁹⁸⁶⁾は寛弘七年の誤認であると考えられることを明らかにしてきた。

本書の撰述年次を寛弘七年に改めることは、寛弘二年⁽¹⁰⁰⁵⁾撰『大乘対俱舍抄』、長和二年⁽¹⁰¹³⁾撰『俱舍論頌疏正文』といった晩年の俱舍論研究と本書の関連や、跋文にみられる「海公」を安海とする従来の見解に対して再考を促すものであり、今後の『要法文』研究はこれらの点に留意した上でなされるべきであろう。

末筆ながら貴重な資料の閲覧に当たり御厚情を賜りました
各所蔵寺院・機関の御当局に衷心より甚深の感謝を申し上げます。

1 「金沢文庫に見存する恵心僧都撰述に就て」『龍谷学報』309, 1934

2 「源信和尚撰述著作解題」『龍谷学報』(317, 1936)

3 「恵心教学の基礎的研究」417頁（永田文昌堂、1962）
4 人物叢書195『源信』138—139頁（吉川弘文館、1988）

5 身延文庫典籍調査会編『身延文庫典籍目録』上（久遠寺、2003）、後藤憲二編『寛永版書目并図版』日本書誌学大系91（青裳堂書店、2003）、大蔵会編『大蔵会展観目録』319頁（文華堂書店、1981）、前掲「源信和尚撰述著作解題」等参照。なお金沢文庫本、史料編纂所本は各機関所蔵のマイクロフィルムの紙焼きに拠った。

6 井上光貞大僧正章介『往生伝法華験記』日本思想大系7、573頁（岩波書店、1974）

7 落合勝俊監修『中国・日本経典章疏目録』七寺古逸経典研究叢書6、304頁（大東出版、1998）

8 『大日本仏教全書』32、398頁。

9 ただし「七年」を「二年」と見誤るとは通常考え難い。寛和年間とは三年間しかなく寛和七年という年は存在しない為、寛弘七年の干支「庚戌」の戌により寛和二年（丙戌）とするか、或いは「七」に虫損があり残画からそれを「二」と推測したのか等、想像の域を出ないが、何れにせよ「寛弘」を「寛和」と誤認した事により派生する副次的な誤りであると考えられる。

〈キーワード〉 源信 安海 『要法文』

国際仏教学大学院大学 博士課程

as the true meaning of the Tendai teaching. Yet, at the same time, Shōshin appears to contradict himself by denying *honrai-jikaku-butsu*. For in his *Hokke-Gengi-Shiki*, he instead takes the Buddha as described in the *Lotus Sūtra* to be merely *sambhogakāya*. This would suggest that when it is necessary to identify the Tendai teachings with Shingon, Shōshin accepts *hongaku* from the standpoint of Principle, in an actual positive rather than merely potential sense, despite this contradiction between his two works. This paper argues that it is for this reason that Shōshin, despite regarding the Buddha as merely *sambhogakāya*, was nonetheless forced to clearly assert that the Buddha as *dharmakāya* did indeed constitute the true understanding of the Tendai teaching.

129. On Shōshin's Acceptance of the *Chu-Ninnō gokoku hannyaharamitsu kyō*

MATSUMOTO Tomomi

In this paper I focus on Hōjibō-Shōshin's study of the *Renwang huguo boruojing shu*. Shōshin often quotes this text in his *Sandaibu-shiki* (三大部私記). It is generally supposed that Guanding wrote the commentary according to Zhiyi's lectures. However, in fascicle 6 of the *Hokkegengi-shiki* (法華玄義私記), Shōshin denies the opinion that Guanding wrote the *Renwang huguo boruojing shu* and follows ideas from the *Chu-Ninnō gokoku hannyaharamitsu kyō* (註仁王護国般若波羅蜜經) attributed to Saichō instead. The *Chu-Ninnō gokoku hannyaharamitsu kyō* is almost identical with the *Renwang huguo boruojing shu* written by Jizang. On the assumption that Saichō copied Jizang's work, Shōshin opposes the *Renwang huguo boruojing shu* on the basis of this authorial issue. This is a good example to indicate Shōshin's intention to attach greater importance to the contents of the views than their author.

130. On the Date of the *Yō hōmon* by Genshin

UESUGI Tomofusa

Previously, it was considered that the *Yō hōmon* 要法文 by Genshin 源信

(942–10117) can be dated to Year 2 of the Kanna Era 寛和二年 (i.e. 986) on the basis of the colophon appended to the most widely spread edition of the text. However, a different recension of the text found in the collection of the Kanazawa Bunko (Kanagawa Pref.) contains a colophon dated Year 7 of the Kankō Era 寛弘七年 (1010). The necessity to re-examine the composition date of the *Yō hōmon* has already been pointed out, but no philological investigation into this problem has been undertaken so far. In this paper, I take into consideration old manuscripts of the text which have not been studied hitherto. On the basis of a comparative analysis of these manuscripts, I conclude that the *Yō hōmon* must have been compiled in Year 7 of the Kankō Era (1010), which calls for a revision of the previously accepted date.

131. Interpretations of the *Ōjōyōshū* by Benchō and Ryōchū

NASU Kazuo

In the *Ōjōyōshū*, Genshin places the contemplative *nembutsu* in a superior position to its vocal recitation. He considers the contemplative practice, represented by the absolute and phenomenal *nembutsu*, to be the highest form of *nembutsu* practice. Genshin does not consider the recitation to be the most significant Pure Land practice.

On the other hand, Hōnen establishes his teaching as the sole practice of *nembutsu* recitation following Shandao's idea of "establishing faith through practice" in his *Guanjing sitie shu, sanshanyi*. Based on his understanding of *nembutsu*, Hōnen reinterprets Genshin's *Ōjōyōshū*. Hōnen does not consider the other types of *nembutsu* discussed in the text, such as the contemplative *nembutsu*, three kinds of ritual protocols, and the visualization of the Buddha, to be very important practices.

Benchō and Ryōchū, the second and third patriarchs of the Jōdo Shū, continue Hōnen's position and interpret the *Ōjōyōshū* through their master's understanding of *nembutsu*. However, they also emphasize the significance of the other types of *nembutsu* — the contemplative *nembutsu*, the three kinds of ritual protocols, and the visualization of the Buddha — which had been ignored by Hōnen. Further, they recognize the possibility of birth in the Pure Land through practices other than recitation.